

## 【人文学】

&lt;研究論文&gt;

連想法による学校診断ならびに  
映画「青い鳥」による生徒の意識変容

上薊 恒太郎\*1

Clinical School diagnosis by association method and Consciousness change by movie  
'Blue Bird'

KAMIZONO Kohtaro

## Summary

Consciousness surrounding bullying in Japan has a unique structure, and its construction by the end of the 20th century was combined with suicide, school and fear in different ways to constructs of bullying in culturally diverse countries like Germany and Malaysia. The strong combination with death and school has been moderated since the beginning of 2000 by efforts to promote anti-bullying policy in schools, something that continues to the present day in Japan. Sharing with students a 105-minute movie, titled 'A Blue Bird' and featuring the theme of bullying, is one approach used in the anti-bullying efforts in schools. Students in two different junior high schools, S (n=156) and K (n=74), in Nagasaki Prefecture viewed the movie in the end of 2016.

The assessment of the change in consciousness of students after viewing a movie is challenging when analyzing written impressions and opinions that represent personal standpoints and words and phrases used are selected according to grammar and from an intended direction. By comparison, the association method simplifies the collection of associated words through the use of a cue word before and after an intervention, in this case the anti-bullying film. The response words are calculated quantitatively and qualitatively and recorded on a word map for all participants. A well-constructed movie can influence the depth of student self-recognition, and can give suggestions of self-affirmative consciousness to the students, who are in the process of forming a sense of self.

The influence of the anti-bullying movie on the culture of bullying on schools S and K is quantitatively almost similar: the anti-bullying consciousness, which expresses that one must not bully, is increased per number of students at School S 13.2% and at School K 5.4%.

At School S the top three responses from students to the cue word <school> "study" (73.1% per respondents), "friends" (44.2%) and "happy" (34.0%). The movie influenced negative consciousness about <me> significantly ( $p<.05$ ): negative words on <me> decreased 28.3% per student after the movie. The movie gave an impression of "importance" of friends (5.1% increase per student).

\*1 教職課程教授

2017年5月8日受付

2017年7月10日受理

At School K the top three response words to the cue word <school> were “friends” (47.3% per student), “study” (43.2%), “teacher” (39.2%), “happy” (12.2%), and with respect to <oneself> there were increases in “weakness” (5.4% increase per student) and “importance” (4.1% increase) after the movie. There were no statistically significant changes in response words quantitatively concerning the cue word <me>.

The results show that the anti-bullying movie is effective in increasing anti-bullying consciousness and can deeply motivate students to recognize the importance of self. However the influence is qualitatively different amongst schools due to the diversity of school character, such as a friendly happy atmosphere or rather isolated relationships in the school. Especially in School K the management was advised clinically to create cooperative learning opportunities and focus on the relationships of students to nurture a happier school atmosphere.

**Keywords : School Diagnosis, Association Method, Change of consciousness by a Movie,  
Self-affirmative consciousness, bullying**

キーワード：学校診断，連想法，映画による意識変容，自己肯定感，いじめ

## <目次>

はじめに

第1章 <学校>は生徒にとってどのような場か

第2章 <いじめ>意識の変容

第3章 <いのち>と<責任>

第4章 <友だち>はどう意識されたか

第5章 <自分>にみる自己肯定感

第5章1節 2005年佐世保市の<自分>意識

第5章2節 映画「青い鳥」を観たS中学校生徒の  
<自分>意識の変容

第5章3節 映画「青い鳥」を観たK中学校生徒の  
<自分>意識の変容

おわりに

註

参考文献

## はじめに

児童生徒の意識全体を連想法によって集めて、学校の状態を診断することができる。意識状況の診断は、1. 教育学が臨床的に学校運営に関わるやり方であり、2.

学校運営として児童生徒の雰囲気づくりにどう取り組むかを考え、3. 児童生徒の育成として、自己肯定感を育み、学びの基盤を作り出す教育に応じる。学校全体の雰囲気、つまり児童生徒の意識状況を知ることは、学校運営の基礎であり、学校が掲げる理念と方策に根拠を与える。管理職ならびに教職員が目指す個性ある学校の運営は、全体としての児童生徒の意識状況に基盤をおくべきだろう。

長崎県佐世保市の2つの中学校、S中学校ならびにK中学校の生徒が2016年11月ならびに2016年12月に、映画「青い鳥」を観た。この機会に連想法による意識調査をおこない、次の1から4の考察を行った。意識調査の対象は、生徒全体であり、そこから、1. 学校診断を行うことができる。また映画を観る前後に同じ提示語によって調査を行うことから、2. 観客の意識変容から見た映画論、すなわち映画が生徒にとってどのような意味を持つかの分析を行うことができる。3. 学校診断ならびに意識の動いた方向を知ることによって、どのような教育課程を見だし、授業とつなぐかを考えることができる。さらに4. 筆者が2005年末に佐世保市ならびに

五島市の大規模調査<sup>1)</sup>(小学校4年生から中学校3年生, 有効回答数2767。以下2005年調査と略記)をおこなっていることから, およそ10年を経た当該地域の学校の努力について, 現状の意識診断を行うことができる。本論は, この4点をまとめた, 連想法による臨床的学校の診断の試みであると同時に, 映画が生徒の意識に引き起こす意識変容の解明である。その際テーマは, 映画の主題である, いじめにある。したがって本論は, 1. 佐世保市の2つの学校の生徒の意識を臨床的に診断しながら, 2. いじめを中心とした意識について, さらに2005年調査の状況として自己肯定感の育成が課題だと指摘してあったことから, 3. 自己肯定感の現状と方向について, 取り上げた。

取り上げた2つの学校の生徒の意識状況は異なり, したがって両校を合算して論じるのではなく, それぞれをケースとして診断し, 論じるべきだと判断した。異なる意識状態にある学校において, いじめをテーマにした映画がどのような意識変容を生徒に引き起こし, 学校運営としてどのような課題と方策を見いだせるかを考えたい。

臨床の考え方について述べておく。連想法による学校診断は, 学校とは何かの本質を論じるのではなく, 臨床的に, 本論の場合各校の生徒の意識において語るやり方である。また, この映画の何たるかを芸術論として評論するのもなく, 観た人の意識において映画の意味を論じるやり方である。言い換えれば本論は, 外部からの本質論やあるべき姿論ではなく, 学校の一員でありまた映画に参加する者にとって, 学校がどのような意味を持ち, 映画が意味を持ったかを, その場にいる者の意識において明らかにし, 課題を明らかにし, 解決の方途を見いだそうとする教育臨床の論考である。

連想法は, 文法や他者への配慮によって取捨選択された話や文章に至る以前の意識を, さまざまな思いつきの交錯するままに, 言語化される意識水準において掬い取る。提示語から想起する言葉を尋ねる連想法は深層心理を掬い上げる方法であるが, 本論の連想法は個人の深層心理が趣旨ではなく, 相対的に独立した情報空間の場に生起する意識を言葉として集め, 場の全体の意識を見る。連想法による診断は, 集団の意識の場である学校や映画を, 集団の意識において分析する。集められた回答語に

ついては場の参加者がそう言っているとの客観性を主張できるが, 解釈には分析者の主観に生起する見方が入る。その場合のいわゆる客観性は, 連想した言葉の分析とその解釈についての間主観的な理解にある。そもそも学校も映画も, 個別の主観を集めた意識の集団的場として機能しており, 場を構成する者がどう意識するかは主観である。換言すると相対的に他から独立した意識の場において, 参加者の意識が動きながら成立している状況を連想法は言葉として掬い取る。学校の場も映画の場も, 個別主観を包み込んだ全体意識の場として成立している。連想法は, 主観を言葉の集積としてデータ化し, 連想マップとして視覚化し, 連想諸量によって動きをとらえ, 解釈を行う。本論において解釈は, 同一地域のおよそ10年前の意識状況を勘案する歴史的な振り返りのなかにおかれ, また2校の意識状況の異動によって比較分析され, さらに映画前後での意識変容によって意識の動きの意味を確定しようとする, 間主観的な客観性を担保する手続きと共にある。

場にいる者の主観を総合することは, 場の雰囲気とその動きを見定めることになる。相対的に独立して成立する情報空間は, 話し合いによる意思決定手続きはなくても, 息づかいを互いに感じながらの影響関係が成立しており, いわば雰囲気として場が成立している。これに対して, 学校の運営意図や映画の制作意図の説明は, 往々にして権威や個人の意見表明であり, また, 評論家や行政や保護者など学校外からの意見は, 場にいる者の意識ではない。学校に通う者や観客個人の感想による意見表明, インタビューやアンケートも, 個人の意見表明であり, 場全体の意識ではない。個別事例を取り上げる語り口はメディアがよく使う個別エピソードに頼るやり方であり, メディアによって情報を知り意見を言う者は, 個人の相互の意見の応酬になる。

学校は個別意見の応酬に振り回されるよりも, 学校を構成する成員の全体としての意識を根拠にして, 意図的に運営されるはずであり, 映画は評価されてしかるべきである。連想法は, 提示語に関わる知識, 思考, 感情を全体として集めるところから, 場の意識全体の診断が可能であり, 場を構成する者が全体として何を知り考え感じているかの状況診断を提供し, 根拠を持って意識的に場の運営を行うことを可能にする。すなわち連想法によ

る診断は、場の意識全体を根拠として反省的に場を運営し形成していく基盤を提供する。

本論において分析するのは、学校という場にいる生徒の意識であり、映画という場の観客の意識である。学校のイノベーションや映画の評価は、場を構成し意味を作り出している意識において、なされるべきであろう。

映画「青い鳥」は、学校におけるいじめを主題として、重松清の原作、中西健の監督によって、2008年につくられ、上映時間105分である。キャストとして阿部寛、本郷奏多、太賀、伊藤歩などが参加。文部科学省特別選定（少年向、青年向、成人向）／選定（家庭向き）、また長崎県では長崎県映画センターの努力によって長崎県教

育映画等審議会特別推薦（中学校生徒向、高等学校生徒向、青年および成人向）を受けており、生徒に観て考えて欲しいテーマとして、映画として、長崎県映画センターによる上映を進めた。

映画「青い鳥」は、現代のいじめ問題をいじめる側の視点で描く重松清氏の原作の映画化であり、吃音の臨時教師役を若者にも人気の高い阿部寛が演じ、いじめ問題に向き合い、生徒たちのゆれる心に添いながら、“本気の言葉”の大切さと、生きていく上で負うべき責任を静かに語っている。吃音の使用は賛否あろう、教員の苦悩を表現する手段なのであろうが、妙に吃音が後に残る映画であった。上映は長崎県民間団体自殺対策助成事業として上映した。自殺対策として認められたのは、いじめ

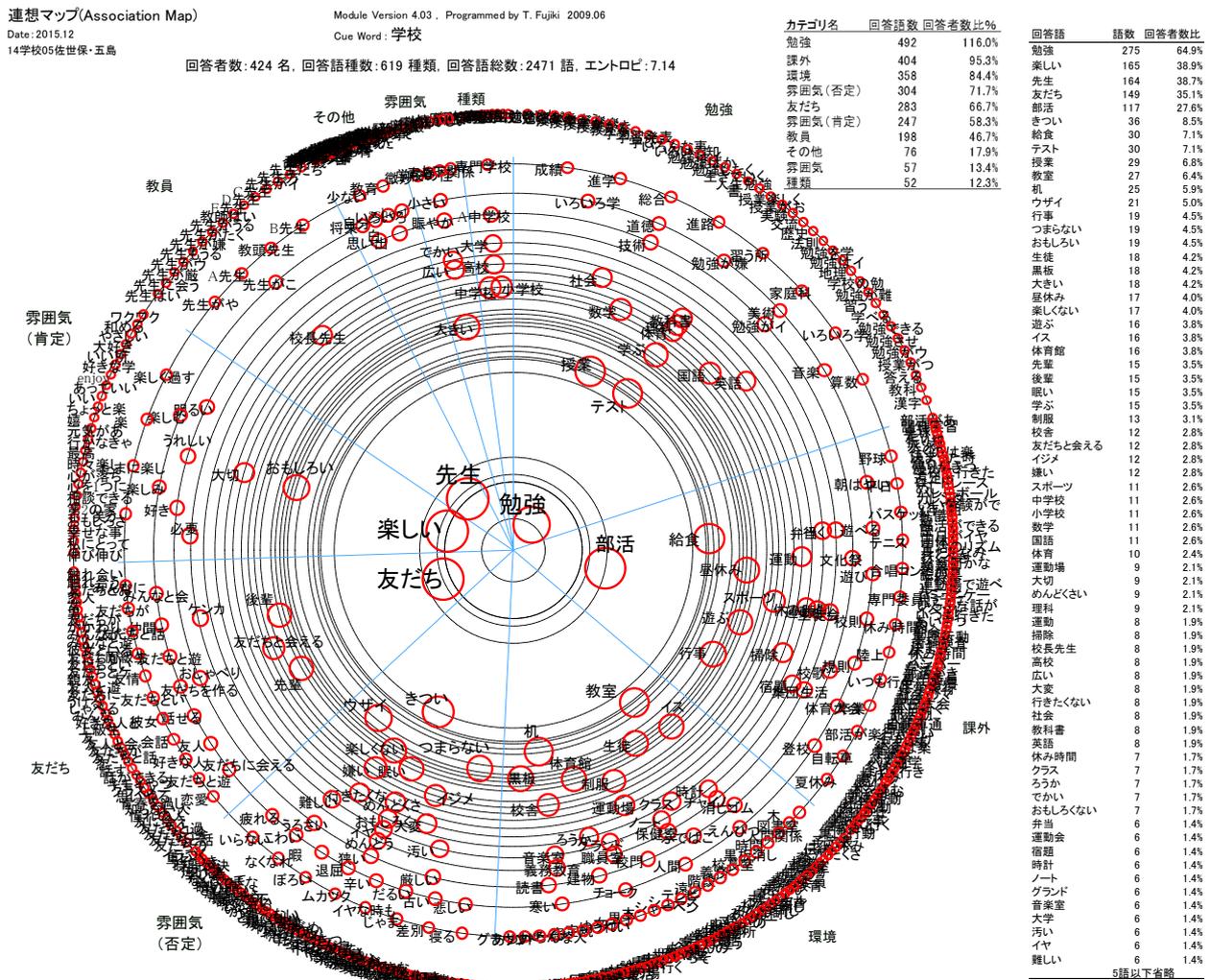


図1 2005年の佐世保市・五島市の14歳の〈学校〉意識





長崎県ではいのちの教育（「長崎っ子の心を見つめる教育週間」2004年）を進めた。佐世保市でも2005年から「いのちを見つめる強調月間」が設けられ、学校の雰囲気を変える努力が行われた。

この学校意識を背景になされた各学校の努力が2016年末にそれぞれの学校においてどうなっているか、〈学校〉についての生徒の意識によって見たい。

S 中学校生徒の学校意識を図2に示す。

S 中学校で〈学校〉意識の中心は「勉強」（回答者数比73.1%）であり、「友達」（44.2%）がいて「楽しい」（34.0%）、「部活」（26.9%）もあるし「先生」（22.4%）もいるとの構造で、図1と大きな変化はない。

図2が図1と異なるのは、学校の《肯定》（回答者数比56.4%）の方が《否定》（23.7%）を上回っている点である。友だちの楽しさを加えると図2の《肯定》は75.0%に及ぶ。生徒の意識において学校の雰囲気を肯定する回答語が多いのは、学校の運営を生徒が概ね肯定している意味を持つ。

K 中学校の意識状況は異なる（図3）<sup>4</sup>。〈学校〉に関するカテゴリ《否定》（回答者数比31.1%）が《肯定》（23.0%）を上回り、「楽しい」（12.2%）は回答語の第9位（図3右表）に退いている。K 中学校における「いじめ」（8.1%）の出現率は、2005年調査の2.8%、およびS 中学校での3.2%と比較して高い。「いじめ」回答語の出現割合は直ちにいじめの存在を意味しない、また提示語〈いじめ〉を見てもいじめが発生していると言える回答語の状況ではない。しかし、現状は一般的にいじめが学校内に起こっていることを想定していい状況として、注意を払う必要がある。

K 中学校の〈学校〉から見える課題は、「楽しい」が生徒の意識に少ないことである。〈学校〉の雰囲気について《否定》的な回答語が《肯定》する回答語よりも回答者数比8.1%多く出現し、「楽しい」回答語に絞って見ると、2005年佐世保市の38.9%、S 中学校の34.0%に比べて、12.2%の生徒に止まる状況<sup>5</sup>は、学校運営として学校の在り方の改善を考えるべきだと見受けられる。

マスメディアの批判的的事件報道に接して学校への印象を抱いている向きには、学校を「楽しい」と想起する意

識が連想マップの中心に位置するほど多いことを意外に思われるかもしれない、学校は疑念の対象として取り上げられがちだから。しかし、生徒の意識において学校は「勉強」する場で、「授業」があり、「先生」がいて、そして「楽しい」場である。楽しさは、成長の場として本来ある雰囲気であり、学校の意識状況を表す回答語である。

学校は「勉強」する場で「授業」があるといっても、日本の児童生徒には、勉強の道具である教科書の意識は薄い。S 中学校で回答者数比1.9%、K 中学校で5.4%、2005年調査で1.9%、1999年マレーシアの小学生で「book」が11.4%、マレーシアの大学生で38.6%、日本と同じく教科書無償であるドイツの大学生で「Bücher」が3.8%<sup>6</sup>出現する。教科書意識の薄さは、無償だからであろうか、それとも参考書、プリントなどの多い授業をおこなっているということだろうか。生徒にとって教科書以上に大切なのは、〈学校〉が「友達」のいる場であり、友だちに会える楽しさの場である点である。

## 第2章 〈いじめ〉意識の変容

友だちに会える楽しさの場が、いじめによって苦痛の場に暗転する意味は、児童生徒にとって大きい<sup>8</sup>。雰囲気が異なる2つの学校において、いじめを主題にした映画「青い鳥」がどのように受け取られたのか、〈いじめ〉についての生徒の意識変容を見たい。

S 中学校生徒の〈いじめ〉に関する意識（図4、映画を観る前）を見ると、いじめは「だめ」（回答者数比15.9%）、「してはいけない」（12.1%）との意識が強く、上位2語で、計28.0%に及ぶ。これは日本の学校において数少ない例であり、S 中学校がいじめに立ち向かう姿勢を持っており、それが生徒に浸透していると理解できる。

数少ない例だということのも、上藺恒太郎は1999年のマレーシアはペナンでの調査に基づいて、「聖マレーシア大学ペナン校における連想調査で目立つのは、〈bully いじめ〉が「bad 悪い」とする意識の強さである。人数比百分率で19.3%、「not good よくない」を加えると26.5%を占める」（上藺恒太郎、2003、p.17）、また、「ブルネイでの調査を参照しても、マレーシアと同様の様子が伺える」（上藺恒太郎、2003、p.18）と、いじめ

は「bad 悪い」(29.2%)、「hate 憎む」(29.2%)感情が回答語の第1位を占めることを指摘して、いじめに対抗する回答語が全部で「9.6%に止まる日本よりも、マレーシアやブルネイがいじめに関して安心して過ごせる気がする」(上菌恒太郎, 2003, p.18)と書いたが、同様の安心して過ごせそうな意識状態にある学校が佐世保市に実現しているからである。いじめを制する回答語上位2語で28.0%に及ぶS中学校の意識状況を作り出したのは意識的な学校運営の成果であろう。

同じ2003年の論文に上菌恒太郎は、長崎市の大学生の調査の結果の特徴は、「自殺」という回答語が第1位、回答者数にして57.3%に及ぶことを指摘し、「〈いじめ〉にとって「自殺」が定義域に入っており、いじめとていば誰もが自殺と思う、そう言っている」(上菌恒太郎, 2003, p.19)と書かざるを得なかったし、また「い

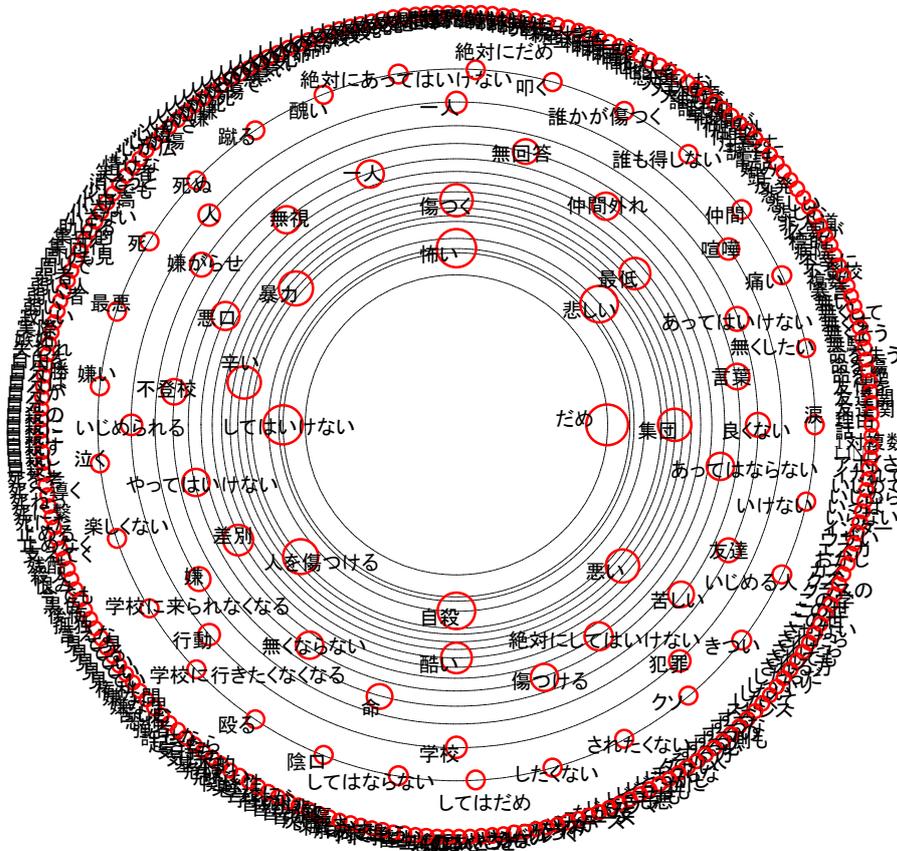
じめによる死の報道が日本で相次ぎ、長崎市でも起こった影響が1996年の調査にどれほどであるかは、2002年の調査と比べるとわかる。結論を先取りすれば、強い印象を与えていると認められ、2002年になってもいじめ概念の基本構造は変化していない」(上菌恒太郎, 2003, p.19)と書いた。その基本構造とは、〈いじめ〉が「自殺」と「学校」とに強く結びついており、国語辞典の〈いじめ〉の定義を書き換えさせた意識構造の変化であった<sup>9)</sup>。

国際比較調査による1996年の上記論文(上菌恒太郎, 2003)では大学生のいじめ意識について比較したが、同じ意識構造は1996年の長崎市の中学生にも見られる(図5)。長崎市の中学校2年生を取り上げると(図5)、「自殺」(回答者数比44.2%)は〈いじめ〉の定義域に入っており、「してはいけない」(23.7%)との意識が

連想マップ(Association Map)  
2016年11月S中学校上映前

Module Version 5.01  
Cue Word: いじめ

回答者数:157名, 回答語種数:306種類, 回答語総数:605語, エントロピ:7.49, 連想量総和:21.38



回答語	語数	回答者数比
だめ	25	15.9%
してはいけない	19	12.1%
怖い	18	11.5%
自殺	16	10.2%
悲しい	16	10.2%
人を傷つける	13	8.3%
暴力	12	7.6%
悪い	11	7.0%
集団	11	7.0%
辛い	11	7.0%
傷つく	10	6.4%
酷い	9	5.7%
最低	9	5.7%
差別	8	5.1%
悪口	7	4.5%
絶対してはいけない	7	4.5%
あってはならない	6	3.8%
やってはいけない	6	3.8%
一人	6	3.8%
傷つける	6	3.8%
仲間外れ	6	3.8%
無くならない	6	3.8%
無視	6	3.8%
苦しい	5	3.2%
言葉	5	3.2%
不登校	5	3.2%
無回答	5	3.2%
命	5	3.2%
あってはいけない	4	2.5%
嫌	4	2.5%
嫌がらせ	4	2.5%
友達	4	2.5%
良くない	4	2.5%
いじめられる人	3	1.9%
一人ぼっち	3	1.9%
学校	3	1.9%
喧嘩	3	1.9%
行動	3	1.9%
人	3	1.9%
犯罪	3	1.9%

図4 S中学校生徒の〈いじめ〉に関する意識





値が変わって、比較できない。19歳以下の自殺件数は内閣府が2015年に発表した内閣府・警察庁「自殺の状況」による統計<sup>10)</sup>によると、当該人口が減少しているにもかかわらず、自殺は必ずしも減少していない。すなわち、1998年の19歳以下の自殺者数が720であった時点ピークに、600を超える年を挙げると1999年に674、2005年に608、2006年に623、2008年に611、2011年に622と、高い水準が続いている。

こうした時代の背景のなかで行った1996年の長崎市を中心とした中学校2年生の意識(図5)と2016年12月K中学校の図6を比較すると、〈いじめ〉に対する切迫した気分は薄らいでいる。しかし、意識の基本構造は変わっていない。すなわち、「自殺」との結びつきが薄れ、「学校」の印象が薄れ、「悲しい」感情は継続しているが「怖い」気分は薄れ、「金を取る」「殴る」「無視」「仲間外れ」などやり方の直接性が薄れて「悪口」に止まっている。そして、この〈いじめ〉意識構造は、世間の影響だと責任放棄するのではなく、学校の努力によって変わることをS中学校図4の〈いじめ〉の連想マップが示している。

いじめが「自殺」と「学校」とに強く結びつく意識は、いのちの教育によって結果したのだろうか。

長崎県ではいのちの教育(「長崎っ子の心を見つめる教育週間」2004年から)を進めてきた。その結果2006年の時点で「(生命尊重の)7.9パーセントを超える増加は、いくつもの事件を契機にした長崎県のいのちの教育の成果だと見なせるだろう」(上菌恒太郎, 2011, p.266)と上菌恒太郎は論じた。これは、カテゴリ《大切》に属する〈いのち〉の回答語が、9歳156名の調査で49.4%に、10歳382名で46.9%に増加した点をとらえて論じた。佐世保市でも2005年から「いのちを見つめる強調月間」が設けられたが、K中学校の場合、〈いのち〉が《大切》との意識は、提示語〈いのち〉の調査によって映画を観る前に48.8%だったから、おおよそ長崎県での生命尊重意識の水準を維持していることがわかる。

S校ならびにK校が佐世保市における生命尊重、平和教育、いじめに関する教育の一端を表していると考え、〈いじめ〉に関する意識は、一つは、いのちの教育を維持するなかで時代とともに薄れたと推察される。もう一つは、学校の努力によって、いじめをしてはならないとの意識が、いじめに対抗する意識の醸成としてS校、K校に見られたように浸透してきたと考えられる。しかし、なお課題は残る。「強調月間」などの取り組みが、

表1 映画を観た後のS中学校生徒の〈いじめ〉に関する回答語の変化

2016年11月S中学校上映前					S中学校上映後				
Cue Word:いじめ					増加 減少				
					新出		消失		
回答語	語数	属性	回答差 実人数	回答差 回答者数比数%	回答語	語数	属性	回答差 実人数	回答差 回答者数比数%
悲しい	16	減少	-10	-6.4	見て見ぬ振り	11	増加	10	6.3
だめ	25	減少	-7	-4.5	卑怯	10	新出	10	6.3
怖い	18	減少	-7	-4.5	やっちはいけない	12	増加	6	3.8
暴力	12	減少	-7	-4.5	責任	6	新出	6	3.8
悪い	11	減少	-7	-4.5	してはいけない	23	増加	4	2.5
差別	8	減少	-7	-4.5	陰口	6	増加	4	2.5
自殺	16	減少	-6	-3.8	気付かない	4	新出	4	2.5
酷い	9	減少	-6	-3.8	悪口	10	増加	3	1.9
辛い	11	減少	-5	-3.2	苦しい	8	増加	3	1.9
不登校	5	消失	-5	-3.2	いけない	5	増加	3	1.9
集団	11	減少	-4	-2.6	したらだめ	4	増加	3	1.9
絶対にしてはいけない	7	減少	-4	-2.6	苦しむ	4	増加	3	1.9
傷つける	6	減少	-4	-2.6	人を苦しめる	3	新出	3	1.9
仲間外れ	6	減少	-4	-2.6					
無視	6	減少	-4	-2.6					
命	5	減少	-3	-1.9					
良くない	4	減少	-3	-1.9					
喧嘩	3	消失	-3	-1.9					
			2語差以下省略						

行事に流れ、いじめをしてはならない、に止まり、後述するように、いのちを支える理由の多様性を考えるところに、さらに生徒の自己肯定感育成につながるべきだと、一層の努力の方向を示すことができる。

2つの中学校生徒の意識がこの意識状況下で、いじめに関する映画「青い鳥」を観て、どう変化したかを見る。結論を先取りすると、日頃の教育が映画を観る視点を与えている。表1は「いじめ」に関して映画の後に変化したS中学校生徒の回答語である。「見て見ぬ振り」(回答者数比6.3%増加)がいじめであるとの論理は、映画が与えたメッセージであり、それは「卑怯」(6.3%増加)だとの意識が最も増加した回答語である。「やっではいけない」(3.8%増加)、「してはいけない」(2.5%増加)と、図4に見える映画を観る前のS中学校生徒の意識の上位を占めていた「だめ」「してはいけない

い」のいじめを制する方向が強化されている。

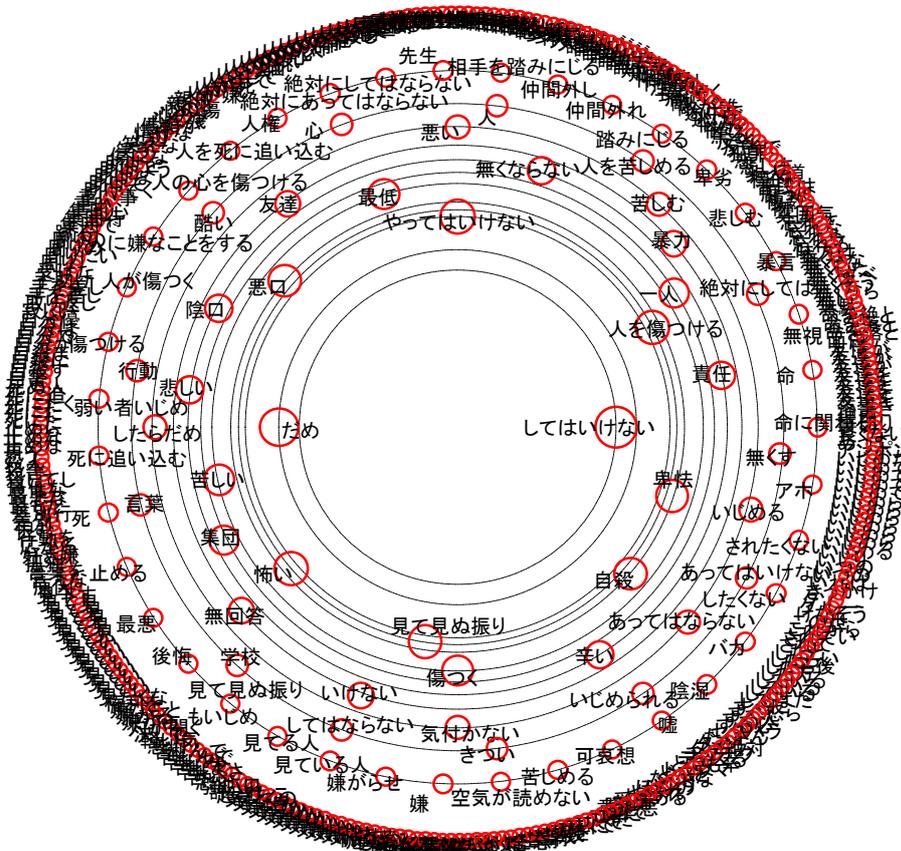
表1でS中学校の「いじめ」に関する回答語の変化を見ると、「だめ」(回答者数比4.5%減少)、「絶対にしてはいけない」(2.6%減少)が減少しているが、回答語として威儀を正して「やっではいけない」「してはいけない」と表現するようになった印象がある。「やっではいけない」「してはいけない」といじめを制する表現について回答語全体として増減を集計すると、15.6%の増加である。S中学校の「いじめ」による回答語全体としては、回答語総数が14.7%増加しており、いじめを制する回答語の増加が意識変化の柱になっている。すなわち映画を観る前の意識、いじめは「だめ」という方向が「やっではいけない」「してはいけない」として映画の後に一層強く意識された。

その結果S中学校では、いじめをしてはいけないとの意識は、いじめを否定する回答語の増減を総計すると、

連想マップ(Association I)Date:2017.2.18  
2016年11月S中学校上映後

Module Version 5.01  
Cue Word: いじめ

回答者数:158名, 回答語種数:386種類, 回答語総数:650語, エントロピ:8.02, 連想量総和:24.61



回答語	語数	回答者数比
してはいけない	23	14.6%
だめ	18	11.4%
やっではいけない	12	7.6%
見て見ぬ振り	11	7.0%
人を傷つける	11	7.0%
怖い	11	7.0%
悪口	10	6.3%
自殺	10	6.3%
卑怯	10	6.3%
苦しい	8	5.1%
最低	8	5.1%
傷つく	8	5.1%
一人	7	4.4%
集団	7	4.4%
陰口	6	3.8%
辛い	6	3.8%
責任	6	3.8%
悲しい	6	3.8%
無くなる	6	3.8%
いけない	5	3.2%
暴力	5	3.2%
無回答	5	3.2%
友達	5	3.2%
あつてはならない	4	2.5%
いじめる人	4	2.5%
したため	4	2.5%
悪い	4	2.5%
気付かない	4	2.5%
苦しむ	4	2.5%
あつてはいけない	3	1.9%
いじめられる人	3	1.9%
きつい	3	1.9%
してはならない	3	1.9%
学校	3	1.9%
言葉	3	1.9%
行動	3	1.9%
酷い	3	1.9%
心	3	1.9%
人	3	1.9%
人を苦しめる	3	1.9%
絶対にしてはいけない	3	1.9%
無さ	3	1.9%

図7 S中学校生徒の映画を観た後の「いじめ」に関する意識

回答者数比 15.7%増加している。すなわち、映画「青い鳥」を観て、15.7%のいじめをしてはいけないとの意識の増加があった。

S 中学校では回答語種数も〈いじめ〉に関して回答者数比 26.1%増加している。表 1 によって新たに想起された回答語を見ると、「卑怯」(6.3%新出)、「責任」(3.8%新出)、「気付かない」(2.5%新出)といった意識が映画によって新たにもたらされている。

その結果、S 中学校生徒の映画を観た後の〈いじめ〉に関する意識は、図 7 のようになった。

K 中学校の〈いじめ〉意識の変容を示す表 2 を見ると、映画「青い鳥」によって、いじめは「気付かない」(回答者数比 8.1%新出)、「わからない」「見て見ぬ振り」(それぞれ 4.1%新出)の方向に意識が動き、意識の空白のなかでいじめが発生する可能性を、新出の言葉によって意識している。いじめが図 6 に見るように必ずしも目に見える「暴力」(18.9%減少)とは限らない、「悲しい」と言っておれないと、映画が意識させている。その

結果いじめを否定する回答語の増減を総計すると、いじめをしてはいけないとの意識が、K 中学校の生徒の間で 13.5%増加している。

K 中学校では、前後の連想マップにおいて回答語総数はほとんど変化せず 1.0%の増加に止まるが、回答語種数が 37.9%増加している。新しい言葉が増えたわけで、表 2 に見る新出の回答語が、〈いじめ〉について新たな気づきとして、語種数を増やしている。気づきの一つとして「卑怯」(4.1%新出)があり、S 中学校でも 6.3%新出している。「卑怯」は、映画「青い鳥」による共通する新たな気づきである。そのほか「してはいけない」「やっではいけない」(それぞれ 2.7%増加)といじめに対抗する意識が強化されている。しかし K 中学校においては「してはいけない」「やっではいけない」という意識は、全体として 4.0%の増加に止まっている。K 中学校において、いじめが意識の空白において発生している可能性に気付いたのだから、そこから教育として、いじめに対抗し、いじめを制する雰囲気に向かう努力につなげたい。

表 2 映画を観た後の K 中学校生徒の〈いじめ〉に関する意識変化

2016年12月K中学校上映前				K中学校上映後				増加	減少	
提示語:いじめ								新出	消失	
回答語	語数	属性	回答差	回答差	回答語	語数	属性	回答差	回答差	
			実人数	回答者数%				実人数	回答者数%	
暴力	17	減少	-14	-18.9	気付かない	6	新出	6	8.1	
悲しい	17	減少	-8	-10.8	わからない	3	新出	3	4.1	
悪口	10	減少	-5	-6.8	見て見ぬ振り	3	新出	3	4.1	
学校	7	減少	-5	-6.8	卑怯	3	新出	3	4.1	
自殺	13	減少	-4	-5.4	してはいけない	6	増加	2	2.7	
LINE	4	消失	-4	-5.4	苦しい	5	増加	2	2.7	
だめ	12	減少	-3	-4.1	やっではいけない	3	増加	2	2.7	
酷い	9	減少	-3	-4.1	いじめる人	2	新出	2	2.7	
暴言	6	減少	-3	-4.1	嫌い	2	新出	2	2.7	
無視	5	減少	-3	-4.1	助け	2	新出	2	2.7	
可哀想	4	減少	-3	-4.1	人を傷つける	2	新出	2	2.7	
差別	3	消失	-3	-4.1	転校	2	新出	2	2.7	
死	5	減少	-2	-2.7	忘れない	2	新出	2	2.7	
仲間外れ	4	減少	-2	-2.7	1語の変化は省略					
不登校	4	減少	-2	-2.7						
一人ぼっち	3	減少	-2	-2.7						
嫌	3	減少	-2	-2.7						
涙	3	減少	-2	-2.7						
嘘をつく	2	消失	-2	-2.7						
格好悪い	2	消失	-2	-2.7						
仲間外し	2	消失	-2	-2.7						
友達	2	消失	-2	-2.7						
1語の変化は省略										

減少した回答語のうち、当初登場していた回答語「LINE」の消失は、新しい手段によるいじめを映画が扱わなかったことによって生徒の意識から消えたと推察できる。また「差別」の消失は、映画によって課題とされなかったと受け取られたのだろう。このあたりは、制作者の言表はともかく、生徒は映画を見て「差別」問題だと受け取らなかったと理解できる。

### 第3章 〈いのち〉と〈責任〉

提示語〈いのち〉に関しては、映画「青い鳥」がいじめによる自死を避けて、転校する形をとったためであろう、大きな変化は見られなかった。映画のパフレットは、自殺未遂を文言に入れるが、映画を観た中学校生徒の意識には響かなかった。

S中学校では映画を観た後〈いのち〉に関して(表3)、「一つ」「一人一つ」「一つだけ」(いずれも回答者

数比 3.2%増加)が目立つ。「一つしかない」(2.6%減少)を考慮しても、「一人一つしかない」(1.9%増加)など、回答語全体として7.4%増加している。これは、映画を観る前の学校での教育の方向が、映画によって強調されたと理解できる。図8がS中学校の映画を観た後の〈いのち〉に関する連想マップである。映画の前と比べると、回答語種数が5.3%増加、回答語総数が6.1%増加している。図8ならびに映画を観る前の連想マップを見て気付くのは、〈いのち〉に関して学校が「一つしかない」から「大切」との多重性に欠ける理由づけのまま教育をおこなっているように見える点である。〈いじめ〉の場合にも垣間見えたが、〈いじめ〉は「だめ」だ、〈いのち〉は「一つ」だと単純に連呼する教育は生徒に深く考えさせる道徳授業とならない。〈いじめ〉の場合には制する重要性があるが、〈いのち〉の場合、大切な理由を「一つしかない」の一つに絞ることは、若者の自

表3 S中学校生徒の〈いのち〉に関する意識変化

2016年11月S中学校上映前					S中学校上映後				
Cue Word:いのち									
		回答差		回答差			増加	減少	
		実人数		回答者数比%			新出	消失	
回答語	語数	属性	実人数	回答者数比%	回答語	語数	属性	実人数	回答者数比%
大事	25	減少	-5	-3.2	一つ	27	増加	5	3.2
一つしかない	25	減少	-4	-2.6	一人一つ	21	増加	5	3.2
生きる	5	減少	-4	-2.6	一つだけ	13	増加	5	3.2
事故	4	消失	-4	-2.6	守る	7	増加	5	3.2
脳	4	消失	-4	-2.6	儂い	6	増加	4	2.5
かけがえのない	11	減少	-3	-1.9	いじめ	5	増加	4	2.5
無くしてはいけない	6	減少	-3	-1.9	誰にでもある	4	新出	4	2.5
親から貰った	4	減少	-3	-1.9	失ってはいけない	6	増加	3	1.9
親	3	消失	-3	-1.9	一人一つしかない	5	増加	3	1.9
生まれる	3	消失	-3	-1.9	気持ち	4	増加	3	1.9
赤ちゃん	3	消失	-3	-1.9	粗末にはいけない	4	増加	3	1.9
2語差以下省略					なくなる	3	新出	3	1.9
					2語差以下省略				

表4 K中学校生徒の〈いのち〉に関する意識変化

2016年12月K中学校上映前					K中学校上映後				
提示語:いのち									
		回答差		回答差			増加	減少	
		実人数		回答者数比%			新出	消失	
回答語	語数	属性	実人数	回答者数比%	回答語	語数	属性	実人数	回答者数比%
家族	9	減少	-8	-10.8	人	4	増加	3	4.1
生命	8	減少	-7	-9.5	2語差以下省略				
一つしかない	15	減少	-3	-4.1					
ハート	4	減少	-3	-4.1					
友達	4	減少	-3	-4.1					
体	3	消失	-3	-4.1					
2語差以下省略									



メロカ 12.8, イギリス 6.6, イタリア 4.8。欧米諸国の死亡原因の 1 位は、事故である) に比べて高い。〈いのち〉は「一つ」「一つしかない」から「大切」だとの教えは、自死に至る若者を救い出すには不十分であり、多様な理由に気づくいのちの教育を工夫するところに、いま日本の生命尊重教育は至っている。それは、S 中学校ならびに K 中学校の課題でもある。

K 中学校では提示語 〈いのち〉による回答語の増減は

少なく、変化内容を見ると(表 4), 単語の言い換えとして想起できる類似語「生命」(回答者数比 9.5%減少), 「ハート」(4.1%減少)が減少し、また「家族」(10.8%減少)に向かう意識が薄れている。「いじめ」(2.7%消失)の回答語が 2 語であるが消失しており、自死を避けた映画の選択が意識に反映したと思える。

〈いのち〉の回答語に関する各種連想指標も変化が少ない。回答者数 74 名の映画を観る前後の指標は、回答

表 5 S 中学校生徒の〈責任〉意識の変化

2016年11月S中学校上映前					S中学校上映後					
Cue Word:責任										
					増加		減少			
					新出		消失			
回答語	語数	属性	回答差 実人数	回答差 回答者数比%	回答語	語数	属性	回答差 実人数	回答差 回答者数比%	
重い	30	減少	-7	-4.5	大切	17	増加	9	5.7	
リーダー	8	減少	-7	-4.5	忘れてはいけない	6	新出	6	3.8	
プレッシャー	9	減少	-5	-3.2	守る	7	増加	4	2.5	
無回答	11	減少	-4	-2.6	しないといけない	4	新出	4	2.5	
生徒会	4	消失	-4	-2.6	忘れない	4	新出	4	2.5	
仕事	15	減少	-3	-1.9	自分	7	増加	3	1.9	
緊張	4	減少	-3	-1.9	背負う	5	増加	3	1.9	
皆をまとめる	3	消失	-3	-1.9	自分がやったこと	3	新出	3	1.9	
重たい	3	消失	-3	-1.9	守らなければならない	3	新出	3	1.9	
信用	3	消失	-3	-1.9	心	3	新出	3	1.9	
2語差以下省略					任せられる	3	新出	3	1.9	
					必要	3	新出	3	1.9	
					2語差以下省略					

表 6 K 中学校生徒の〈責任〉意識の変化

2016年12月K中学校上映前					K中学校上映後					
Cue Word:責任										
					増加		減少			
					新出		消失			
回答語	語数	属性	回答差 実人数	回答差 回答者数比%	回答語	語数	属性	回答差 実人数	回答差 回答者数比%	
リーダー	12	減少	-10	-13.5	忘れない	8	新出	8	10.8	
仕事	7	減少	-5	-6.8	自分がしたこと	4	新出	4	5.4	
重大	5	減少	-3	-4.1	大切	4	増加	3	4.1	
キャプテン	4	減少	-3	-4.1	最後まで	3	新出	3	4.1	
重い	7	減少	-2	-2.7	自分の行動	3	新出	3	4.1	
プレッシャー	3	減少	-2	-2.7	しないといけない	2	新出	2	2.7	
義務	3	減少	-2	-2.7	一生	2	新出	2	2.7	
班長	3	減少	-2	-2.7	考える	2	新出	2	2.7	
無責任	3	減少	-2	-2.7	最後までする	2	新出	2	2.7	
やること	2	消失	-2	-2.7	持たなくてはいけない	2	新出	2	2.7	
リード	2	消失	-2	-2.7	持つ	2	新出	2	2.7	
係	2	消失	-2	-2.7	背負う	2	新出	2	2.7	
最後までやる	2	消失	-2	-2.7	1語の差は省略					
使命	2	消失	-2	-2.7						
先生	2	消失	-2	-2.7						
命	2	消失	-2	-2.7						
1語の差は省略										

語種数が 0.2%増加, 回答語総数が 14.2%減少している。回答語の散らばり具合を数値で表すエントロピは 6.05 から 6.08 へと, 語種数が増えたためであろう, 0.03 の増加で, ほとんど変化せず, 連想マップの各回答語を表す赤い円の面積の合計である連想量総和は 1.4 減少している。

映画「青い鳥」を観て, むしろ〈責任〉意識の変化が生徒に起こっている。

〈責任〉の意識は, S, K どちらの中学校生徒も同様の変容を起こしている。約言すれば, 責任は, 責任の主体が自分に移り, 忘れずに自分が背負うものへと変わった。すなわち生徒の回答語で示すと, 〈責任〉, は映画を観る前の「リーダー」が負う「重い」ものだとの意識から, 「自分がしたこと」を「忘れない」ことが「大切」だとの意識へと映画の後に変化した。

変化の様子は表 5 と 6 の回答語の変化に見るように, 自分を自覚し, 記憶の意味に気付いており, 変化の質として, 主体的になりまた記憶の意味を自覚した点で重要である。

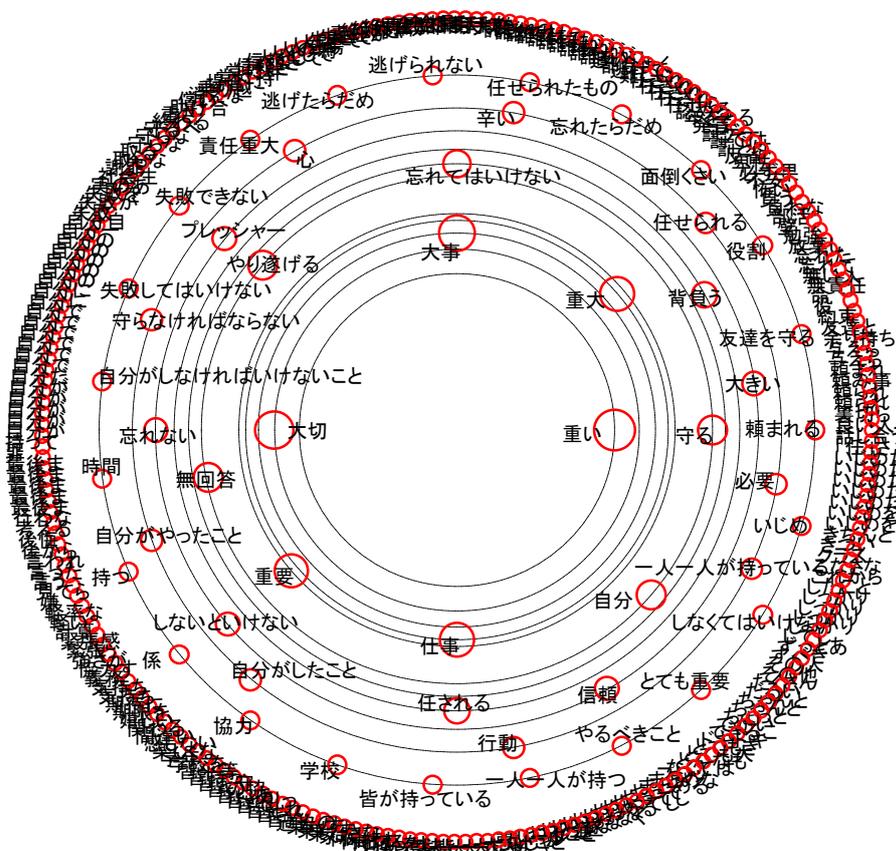
S 中学校の場合, 回答語種数が映画の後に 10.5%増加しているが, その内容は, 表 5 においてその一端が見えるように, 新出の回答語が多い。映画を観る前に想起した〈責任〉に関する回答語種の, 実に 72.5%が消失し, 映画を観た後には 75.1%が新出の回答語種である。すなわち〈責任〉意識は, 映画「青い鳥」によって生徒の意識の中で劇的に変化している。

K 中学校においても, 映画を観る前の〈責任〉についての回答語種数の 69.0%が映画の後に消失し, 映画の後に回答語種数は 23.3%増加したのだが, 74.8%が新出の回答語であった。映画「青い鳥」は, K 中学校の生徒の

連想マップ(Association Map)  
2016年11月S中全校上映後

Module Version 5.01  
Cue Word: 責任

回答者数: 158 名, 回答語種数: 285 種類, 回答語総数: 461 語, エントロピ: 7.55, 連想量総和: 17.53



回答語	語数	回答者数比
重い	23	14.6%
大切	17	10.8%
大事	14	8.9%
仕事	12	7.6%
重大	12	7.6%
重要	11	7.0%
やり逃げる	7	4.4%
自分	7	4.4%
守る	7	4.4%
無回答	7	4.4%
忘れてはいけない	6	3.8%
任される	5	3.2%
背負う	5	3.2%
しないといけない	4	2.5%
プレッシャー	4	2.5%
信頼	4	2.5%
大きい	4	2.5%
忘れない	4	2.5%
一人一人が持っている	3	1.9%
行動	3	1.9%
自分がしたこと	3	1.9%
自分がやったこと	3	1.9%
守らなければならない	3	1.9%
心	3	1.9%
辛い	3	1.9%
任せられる	3	1.9%

2語以下省略

図 9 S 中学校生徒の映画を観た後の〈責任〉意識

責任意識をがらりと変えた。変えた方向は、「自分がしたこと」（回答者数比 5.4%新出）を「忘れない」（10.8%新出），それが「大切」（4.1%増加）だと、表6に見る回答語の変容から集約できる。

その結果、S 中学校生徒の映画を観た後の〈責任〉意識の連想マップ（図 9）をみると、「自分」「自分がしたこと」「自分がしなければいけないこと」の意識を散

りばめて、責任は「重い」「大切」「大事」「重要」で、「忘れてはいけない」「しないといけない」「守らなければならない」と考えるようになった。

責任意識の変容は予想できなかったが、この結果を見ると、映画の後に、責任とは何かを考える授業と組み合わせることが有効だと言える。責任の自覚は、学校として生徒に促したいところであろう、活かしたい。

表 7 S 中学校生徒の〈友だち〉意識の変化

2016年11月S中学校上映前					上映後				
Cue Word:友だち									
回答語	語数	属性	回答差	回答差	回答語	語数	属性	増加	減少
			実人数	回答者数比%				新出	消失
								回答差	回答差
								実人数	回答者数比%
楽しい	35	減少	-14	-8.9	大切	73	増加	8	5.1
一緒にいて楽しい	20	減少	-10	-6.4	何でも話せる	12	増加	5	3.2
大好き	16	減少	-8	-5.1	いじめ	6	増加	4	2.5
喧嘩	14	減少	-6	-3.8	喋る	5	増加	4	2.5
仲間	23	減少	-5	-3.2	好き	4	新出	4	2.5
話す	6	減少	-5	-3.2	優しい	14	増加	3	1.9
遊ぶ	18	減少	-4	-2.6	たくさん	6	増加	3	1.9
よく遊ぶ	4	消失	-4	-2.6	学校	5	増加	3	1.9
信頼できる	7	減少	-3	-1.9	一緒にいてくれる	3	新出	3	1.9
明るい	4	減少	-3	-1.9				2語差以下省略	
一緒にいたい	3	消失	-3	-1.9					
尊敬できる	3	消失	-3	-1.9					
宝	3	消失	-3	-1.9					
頼りになる	3	消失	-3	-1.9					
			2語差以下省略						

表 8 K 中学校生徒の〈友だち〉意識の変化

2016年12月K中学校上映前					K中学校上映後				
Cue Word:友だち									
回答語	語数	属性	回答差	回答差	回答語	語数	属性	増加	減少
			実人数	回答者数比%				新出	消失
								回答差	回答差
								実人数	回答者数比%
楽しい	28	減少	-13	-17.6	大切	30	増加	13	17.6
優しい	19	減少	-12	-16.2	仲間	7	増加	2	2.7
仲が良い	12	減少	-9	-12.2	何でも言い合える	3	増加	2	2.7
遊ぶ	9	減少	-8	-10.8	いじめ	2	新出	2	2.7
大好き	12	減少	-7	-9.5	一人一人違う	2	新出	2	2.7
面白い	10	減少	-7	-9.5	一番	2	新出	2	2.7
喧嘩	6	減少	-3	-4.1	感情	2	新出	2	2.7
friend	3	消失	-3	-4.1	本当	2	新出	2	2.7
信頼できる	3	消失	-3	-4.1	無くしてはいけない	2	新出	2	2.7
頼れる	3	消失	-3	-4.1				1語の差は省略	
話す	3	消失	-3	-4.1					
明るい	6	減少	-2	-2.7					
可愛い	3	減少	-2	-2.7					
相談相手	3	減少	-2	-2.7					
いつも一緒	2	消失	-2	-2.7					
いない	2	消失	-2	-2.7					
お喋り	2	消失	-2	-2.7					
格好良い	2	消失	-2	-2.7					
守る	2	消失	-2	-2.7					
助っ人	2	消失	-2	-2.7					
遊び	2	消失	-2	-2.7					
			1語の差は省略						

### 第4章 〈友だち〉はどう意識されたか

いじめが友だちとの関係で起こるならば、この映画は、友だちとの関係を生徒に考えさせるはずである。映画は提示語〈友だち〉に関して、どのような意識を呼び起こしたのだろうか。結論を約言すると、映画「青い鳥」は中学校生徒に、友だちの大切さを伝えている。

S 中学校でも K 中学校でも、表 7 と表 8 に見るように、提示語〈友だち〉において映画の後に最も増加した回答語は「大切」である。「大切」は、S 中学校で回答者数比 5.1%の増加、K 中学校で 17.6%増加している。すると、「青い鳥」は友だちの大切さを伝える映画だと言える。「大切」の他に、「何でも話せる」(S 中学校、3.2%増加)、「何でも言い合える」「仲間」(K 中学校、2.7%増加)と、友だちの大切さを語る思いが並ぶ。その思いは、友だちを映画を介して振り返って生まれてきた冷静な思いであるように思われる。というのも友だちへ

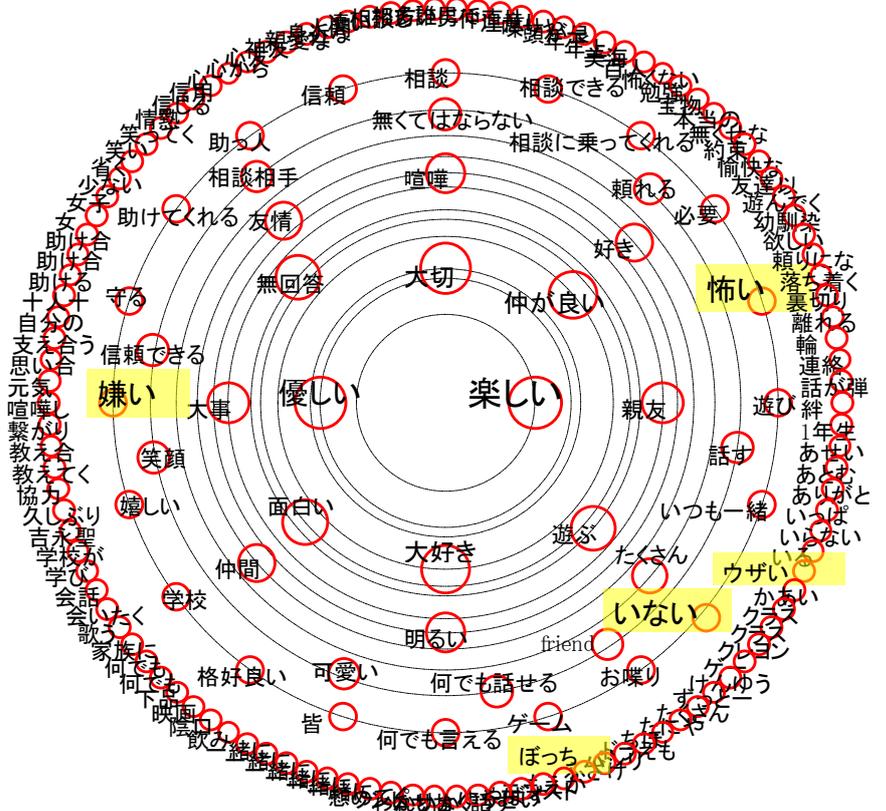
の個別の直接の熱い感情表現と受け取れる「大好き」(S 中学校で 5.1%減少、K 中学校で 9.5%減少)が軒並み減少し、「好き」(S 中学校で 2.5%新出、K 中学校で 6.8%のまま映画を観る前後で変わらず)が増えるか変わらないまま再認識されている。

回答語「いじめ」(S 中学校で 2.5%増加、K 中学校で 2.7%増加)は、2 つの学校とも増加しているが、実態の反映というよりも、映画によって友だちの間でいじめが起こることを改めて認識したのであろう。

映画を観る前、表 8 に見るように K 中学校では、友だちは「楽しい」(回答者数比 37.8%)、「優しい」(25.7%)存在で、「大切」(23.0%)であり、「大好き」(16.2%)で、「仲が良い」(16.2%)、「面白い」(13.5%)という順番で回答語が並ぶ開わりであった。

その陰で、映画を観る前に図 10 に見るように K 中学校では、〈友だち〉は「いない」「嫌い」「怖い」(それぞれ回答者数比 2.7%)の回答語も現れており、1.4%

連想マップ(Association Map) Date: 2017.2.13 Module Version 5.01  
 2017年11月光海中全校上映前 Cue Word: 友だち  
 回答者数: 74 名, 回答語種類: 159 種類, 回答語総数: 342 語, エントロピー: 6.50, 連想量総和: 19.82



回答語	語数	回答者数比
楽しい	28	37.8%
優しい	19	25.7%
大切	17	23.0%
大好き	12	16.2%
仲が良い	12	16.2%
面白い	10	13.5%
無回答	9	12.2%
遊ぶ	9	12.2%
親友	7	9.5%
大事	7	9.5%
喧嘩	6	8.1%
明るい	6	8.1%
好き	5	6.8%
仲間	5	6.8%
友情	5	6.8%
たくさん	4	5.4%
friend	3	4.1%
何でも話せる	3	4.1%
可愛い	3	4.1%
笑顔	3	4.1%
信頼できる	3	4.1%
相談相手	3	4.1%
無くてはならない	3	4.1%
頼れる	3	4.1%
話す	3	4.1%
いつも一緒に	2	2.7%
いない	2	2.7%
お喋り	2	2.7%
ゲーム	2	2.7%
何でも話せる	2	2.7%
皆	2	2.7%
格好良い	2	2.7%
学校	2	2.7%
嬉しい	2	2.7%
嫌い	2	2.7%
守る	2	2.7%
助けてくれる	2	2.7%
助っ人	2	2.7%
信頼	2	2.7%
相談	2	2.7%
相談できる	2	2.7%
相談に乗ってくれる	2	2.7%
必要	2	2.7%
怖い	2	2.7%
遊び	2	2.7%
1語は省略		

図 10 K 中学校生徒の映画を観る前の〈友だち〉連想マップ

であるが「ウザイ」「ぼっち」も現れていた。数は少なくても、こうした回答語は注視するべきである。回答語の質からして、話を聞いてみたい気がする。

映画を観た後 K 中学校で、「嫌い」が 2.7%のまま再び想起されており、「怖い」が 1.4%出現し、他の回答語は消失したが、「本当の人はあまりいない」が 1.4%新たに出現している。1 語や 2 語の変化は偶然性が考えられるが、友だちの大切さを伝える映画の後になお残る友だちへの思いとして留意したい。

S 中学校において映画を観る前の〈友だち〉への同様の否定的な回答語を見ると、「たまに怖い」「少し怖い時もある」「できない」「時には見捨てられる」「ムカつく時もある」がそれぞれ 0.6%現れている。そういう時もあると受け止めて見ていていい回答語だろう。

映画の後に S 中学校では「少し怖い」（回答者数比 0.6%）が残り、後の回答語は消えるが、「信用できない」「敵かもしれない」「本当は・・・」「付き合い方がだるい」「裏切り」「裏切られることもあるかもしれない」「わからない」がそれぞれ 0.6%出現する。これらはしかし、映画を観ながらそういうことも考えたのかと受け止めておいていい回答語であろう。

映画が友だちの大切さを深めた影響を見るとき、友だちとは何かの授業を対応させるといいと思わせる。例を挙げると、上菌恒太郎『連想法による道徳授業 教育臨床の技法』第 5 章第 3 節（上菌恒太郎，2011，pp.214-226）のような友だちの定義に関わる授業を、映画の後に組みたいと思う。それが生徒の意識の流れに沿っている。すなわち、個々人の感想で映画が終わるところを、生徒の意識が動いた価値の方向に沿って、授業と組み合わせる視点を提供できる。その際、映画のどの場面がどうであったと言葉にして授業をつなぐ必要はない。テーマが意識の奥深くでつながればいい。

友だちとは何か、いのち、後述する自己肯定など、映画と通底する課題を同じ方向で扱うとき、学校教育の意図が浸透する。意図的な教育の一環として映画が教育の場に導入されるのは、教育、主として授業と深い意図においてつながるからである。映画のメッセージが、生徒の意識に教育としてつながるとき、映画は有効な教育手段となる。

さらに、生徒の友だち意識の強さは、授業を変える支えになる。友だちと共にあることが楽しいのだから、楽しい関係を教育に活用することを勧める。学校において学びの共同体を形成することが、学校を楽しく学ぶ場にする方向である。児童生徒同士で学ぶ共同体を相手にする授業は、教員も楽しいだろう。教員同士で一致した教育の方向を探る学校は、教員にとっても楽しい。ばらばらに教科を教える意識に走るよりも、学び方を協同の形へと変える学校運営は、児童生徒に楽しさの雰囲気を作りだすだけでなく、学校全体で生徒を育てる教員意識醸成のよすがとなる。

## 第 5 章 〈自分〉にみる自己肯定感

### 第 5 章 1 節 2005 年佐世保市の〈自分〉意識

佐世保市は 2000 年代に入って、2 つの教育上の事件によって知られた。2004 年小学校高学年の事件では、佐世保市の学校教育が疑われる傾向を生んだ。当時しかし、佐世保市の児童生徒の意識において〈学校〉は健全であると、筆者は佐世保市と五島市において連想調査結果を分析して、診断した。それは何より児童生徒が学校について想起する言葉（図 1）に表れており、分析結果を当時の教育長などへ伝えた。

しかし課題は、自己肯定感育成にあるというのが、当時の診断であった。自己肯定感の薄さは、佐世保市だけの課題だけではなく、日本全体の教育課題であり、東京都<sup>12)</sup>、長崎県を含めて自己肯定感育成を課題に掲げてきた。佐世保市と五島市の自己肯定感に関しては、14 歳の連想マップを上菌恒太郎，2011 の 3 頁に載せた。そこでは、2005 年の連想調査（14 歳 389 名）において提示語〈自分〉からの最も多い想起が「人間」（回答者数比 13.9%）であり、「バカ」（12.3%）が 2 番目に多かった、すなわち自己肯定感の薄い状況が佐世保市・五島市を覆っていた（上菌恒太郎，2011，p.3）。意識状況は 13 歳も同様で、長崎県の 2 つの市において 13 歳の児童生徒が提示語〈自分〉に否定的言葉を回答者の 92.2% が思い出ししており「バカ」（9.8%）はその筆頭（上菌恒太郎，2007，p.2）であった。本論では 12 歳の〈自分〉意識（図 12）を掲げる。12 歳 422 名の佐世保市・五島市における〈自分〉意識（図 12）も 13 歳および 14 歳と同様で、最も多い想起が「人間」（回答者数比 16.8%）





S 中学校の状況は、〈自分〉を否定する回答語が 79.2%あり、2005 年調査より悪くないが、改善の必要があることに変わりはない。図 11 をみると、生徒の回答語をカテゴリに分けた《肯定》と《否定》は拮抗している。

映画を観た後しかし、〈自分〉に対する《肯定》(回答者数比 78.6%から 85.5%に増加)が増え、《否定》(79.2%から 50.9%に減少)が減って、自分意識の状況が改善している。自分について想起する言葉のうち、《否定》が減り《肯定》が増えた様子は、映画を観た後の〈自分〉意識である図 13 に《肯定》と《否定》の言葉の量の逆転として現れている。また表 9 の映画前後の各カテゴリに属する回答語数の変化によって明らかである。映画を観ただけで意識状況の改善が見られるのなら、教員が意識して自己肯定感を育む授業に取り組みれば、学校

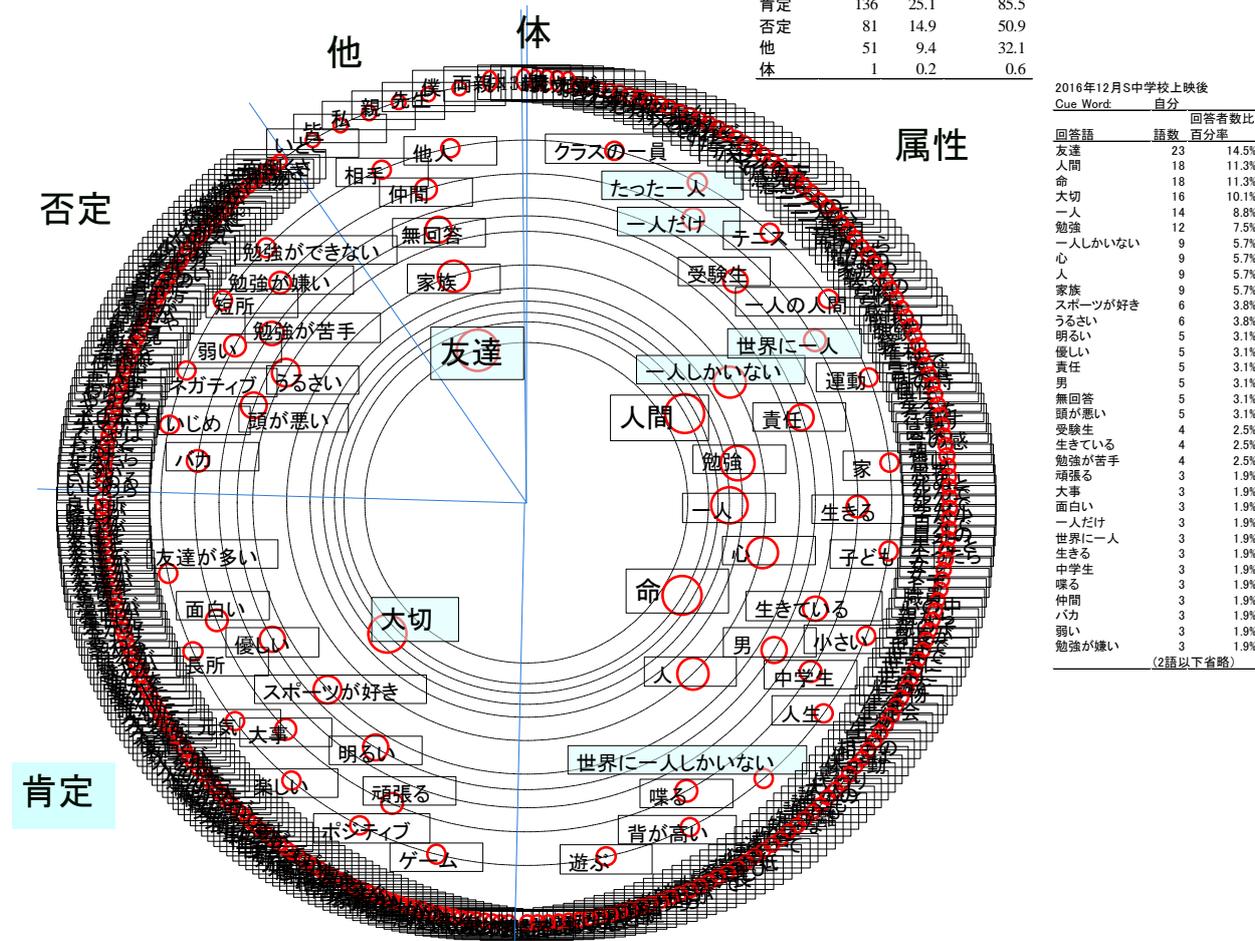
の空気は自己肯定の明るさで満たされるだろう。

映画を観た後の最多回答語を見ると(図 13 の左上)、 「友達」が登場する。また回答語の変化を示す表 10 を見ると、映画の後に最も増えた回答語が「友達」(9.4%増加)である。つまり、生徒は映画「青い鳥」を観て友だちのことを思い出した、映画の主人公は先生だったけれど、生徒には友だちに関する映画だったと理解できる。

映画を観る前に多かった回答語「人間」(回答者数比 13.8%から 11.3%に減少)はいくらか減り、「命」(10.1%から 11.3%に増加)はいくらか増えて、回答語の第 2 位と 3 位を占めた。4 番目に自分が「大切」(4.4%から 10.1%に増加)との自覚が生まれた(図 13 連想マップの左下、中央寄り、および右上の表)。つまり、この映画は生徒の〈自分〉意識を改善した。

連想マップ(Association Map) Date: 2016.12 Module Version 5.01  
 2016年12月S中学校「青い鳥」上映後 Cue Word: 自分  
 回答者数: 159名, 回答語種数: 324種類, 回答語総数: 542語, エントロピー: 7.68, 連想量総和: 20.16

カテゴリ名	回答語数	語数比%	回答者数比%
属性	273	50.4	171.7
肯定	136	25.1	85.5
否定	81	14.9	50.9
他	51	9.4	32.1
体	1	0.2	0.6



2016年12月S中学校上映後  
 Cue Word: 自分

回答語	語数	回答者数比%
友達	23	14.5%
人間	18	11.3%
命	18	11.3%
大切	16	10.1%
一人	14	8.8%
勉強	12	7.5%
一人しかない	9	5.7%
心	9	5.7%
人	9	5.7%
家族	9	5.7%
スポーツが好き	6	3.8%
うるさい	6	3.8%
明るい	5	3.1%
優しい	5	3.1%
責任	5	3.1%
男	5	3.1%
無回答	5	3.1%
頭が悪い	5	3.1%
受験生	4	2.5%
生きている	4	2.5%
勉強が苦手	4	2.5%
頑張る	3	1.9%
大事	3	1.9%
面白い	3	1.9%
一人だけ	3	1.9%
世界に一人	3	1.9%
生きる	3	1.9%
中学生	3	1.9%
仲間	3	1.9%
バカ	3	1.9%
弱い	3	1.9%
勉強が嫌い	3	1.9%

(2語以下省略)

図 13 S 中学校生徒の映画を観た後の〈自分〉意識

回答語をカテゴリに分けて、統計上で量として増えたと言えるか、カイ二乗検定を行うと（表 9）、カテゴリ《否定》と《他》に有意差が浮かび上がった。つまり、自分を否定する言葉は映画を観て有意に減少した（ $p<.05$ ）。「青い鳥」は、自分を否定する言葉を減らし、前向きな気分へと生徒を動かしている。

《他》が増えたのは、友だちを考えたからである。それは、映画前後の回答語を比較した表 9 および表 10 から読み取れる。

表 9 S 中学校生徒が映画「青い鳥」を見る前と後の〈自分〉の回答語のカテゴリ比較

提示語〈自分〉 カテゴリ	(n=159)	
	映画を見る前 人数	映画を見た後 人数
属性	248	273
肯定	125	136
否定	126 ▲	81 ▼
体	2	1
他	32 ▼	51 ▲

(▲有意に多い、▼有意に少ない、 $p<.05$ )

映画を観る前後で〈自分〉の回答語を比較すると、変容の質が見えてくる。最も減っているのは（表 10 左）「頭が悪い」（回答者数比 5.7%減少）で、「バカ」（1.9%減少）は半減し、「アホ」とは言わなくなった。また、一般的な肯定の言い方「元気」（5.0%減少）や

「明るい」（1.9%減少）も減っている。一般的な自分の属性「人間」（2.5%減少）も減っている。

増えたのは、「友達」（回答者数比 9.4%）であり、自分が「大切」（5.2%増加）である（表 10 右）。「一人」（4.4%増加）および「世界に一人」（1.9%増加）が増えた。この二つの回答語を合計すると 10.7%に至るのは、自分が大切である理由を見いだしたと読み取れる。さらに見ていくと、図 13 の右側に「一人」（8.8%）、「一人しかいない」（5.7%）、「一人だけ」（1.9%）、「世界に一人」（1.9%）、「たった一人」（1.3%）、「世界に一人しかいない」（1.3%）を 2 語以上の回答語に見受ける。理由である以上に生徒は孤立感を抱いているのかもしれない。または、いのちが大切である理由として「一つしかない」が多かったのと同じ思考、一人だから大切だとの、根拠を一つしか持たない思考なのだろう。生命尊重、自分意識とともに、理由意識が単純化している。いのちも自分も、多様な理由によってその大切さを支える方向に、学習指導の考え方を変えたい。

自分を大切にすべき理由は、生命尊重でも述べたように、そして自分に関わっては自分のよさを多様に活かす意味で大切だと気付いて欲しいから、もっと多種類欲しい。そこで、自分が大切な理由を探す道徳授業を組みたい。そのために友だちのよさを探す授業を組めばいいと、生徒の意識の動きが教える。また日頃、一人ひとりの生徒の褒める点を見つけて、教員から声をかけたい。

表 10 S 中学校生徒の映画「青い鳥」を観ての〈自分〉回答語の変容

2016年12月S中学校「青い鳥」上映前					S中学校「青い鳥」上映後				
Cue Word:自分					増加 新出				
回答語	語数	属性	回答差 人数	回答差 回答者数比%	回答語	語数	属性	回答差 人数	回答差 回答者数比%
頭が悪い	14	減少	-9	-5.7	友達	23	増加	15	9.4
元気	10	減少	-8	-5.0	大切	16	増加	9	5.7
人間	22	減少	-4	-2.5	一人	14	増加	7	4.4
明るい	8	減少	-3	-1.9	勉強	12	増加	7	4.4
バカ	6	減少	-3	-1.9	スポーツが好き	6	増加	5	3.1
ゲームが好き	5	減少	-3	-1.9	家族	9	増加	4	2.5
女	4	減少	-3	-1.9	心	9	増加	4	2.5
本が好き	4	減少	-3	-1.9	責任	5	増加	4	2.5
面倒くさがり	4	減少	-3	-1.9	世界に一人	3	新出	3	1.9
アホ	3	消失	-3	-1.9	2語差以下省略				
人見知り	3	消失	-3	-1.9					
2語差以下省略									



のだから、学校運営として協同の学びが機能するだろう。

協同に基づく授業が、自己肯定感を育てる方法として、競争や個別に基づく授業よりも有効であることは、すでに報告されている（遠藤ら，2002；Blaney, 1977；Johnson, 1980；Johnson, et al., 1981；Stanne, et al., 1999）となると、なおさらである<sup>13)</sup>。

「友達」を思いやりながら、自分を「大切」にし、学ぶ方法として協同が有効であることを、映画「青い鳥」を観た生徒の意識変化が示している。

### 第5章3節 映画「青い鳥」を観た K 中学校 生徒の〈自分〉意識の変容

2016年12月のK中学校〈自分〉についての映画を観る前の連想マップを、カテゴリに分けて掲げる（図14）。

2005年当時、14歳の〈自分〉から想起する言葉として2番目に多かったのが「バカ」であることに驚いたが、K中学校の場合、「バカ」（回答者数比12.2%）が最多である（図14）。そして自分の未来像を語る回答語は見受けない。この意識状況は改善されるべきである。

「無回答」が多いのも気になる。自分について問われると一般的に筆が止まりやすいが、まあいいやと無回答で流す雰囲気が生まれていたのかもしれない。

自己肯定感育成に友だちとの協同が力になると述べたが、個人として、周りに流されずに自己肯定を貫く力の源泉は、未来への思いであろう。目標のある人間に育てることは、現在の努力に専念する力を生む。おそらくK中学校では、学校自体が対策に追われて、自分の未来の姿に向かって進む意気軒昂な教育になっていないのだら

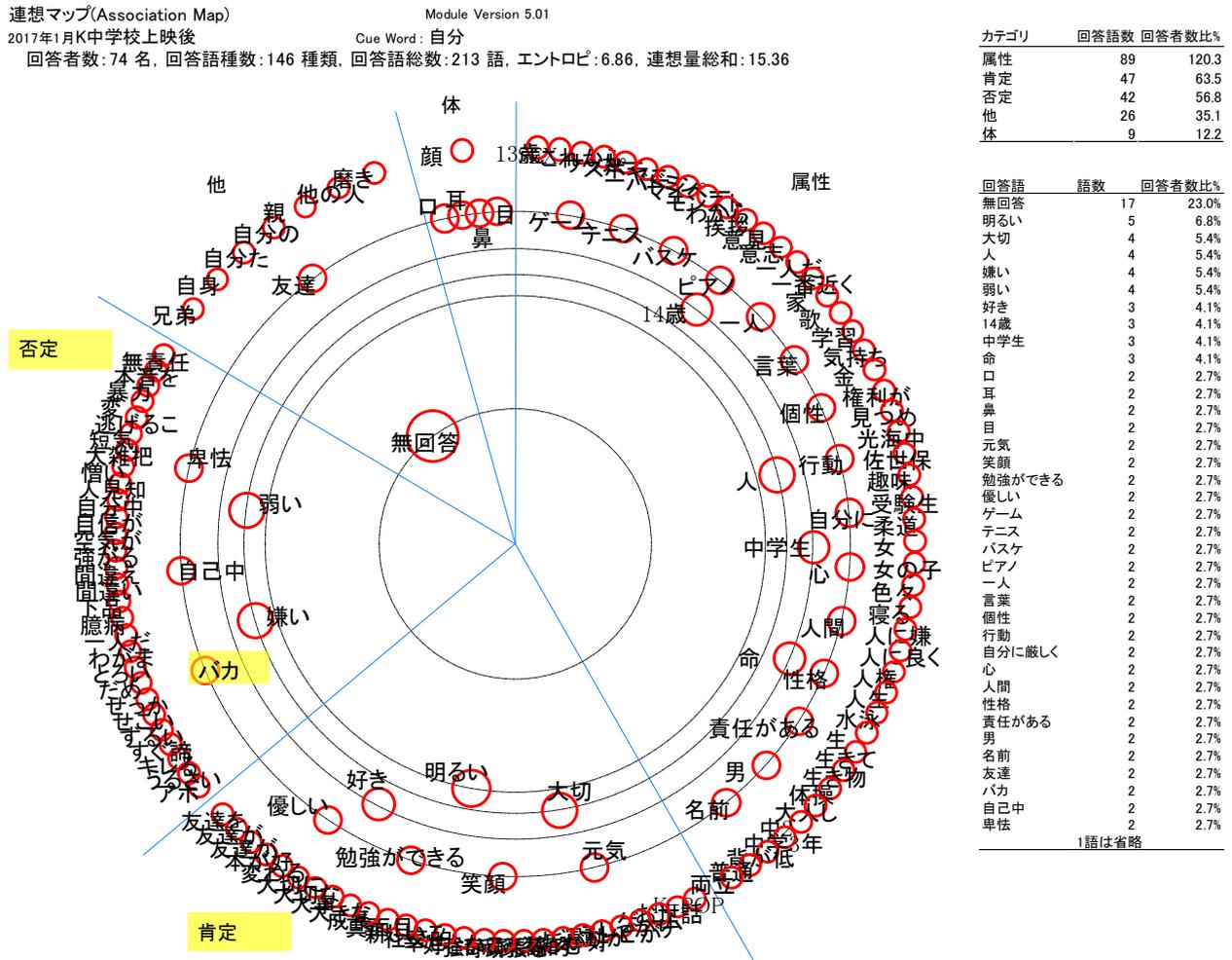


図15 K中学校生徒の映画を観た後の〈自分〉意識

表 11 K 中学校生徒の映画「青い鳥」を観ての〈自分〉回答語の変容

2017年1月K中学校「青い鳥」上映前					K中学校上映後						
							増加	減少			
提示語〈自分〉							新出	消失			
			回答差	回答差				回答差	回答差		
回答語	語数	属性	実人数	回答者数比%	回答語	語数	属性	実人数	回答者数比%		
バカ	9	減少	-7	-9.5	弱い	4	新出	4	5.4		
女	5	減少	-4	-5.4	大切	4	増加	3	4.1		
優しい	5	減少	-3	-4.1	嫌い	4	増加	2	2.7		
うるさい	4	減少	-3	-4.1	好き	3	増加	2	2.7		
ゲーム	4	減少	-2	-2.7	一人	2	新出	2	2.7		
バスケット	4	減少	-2	-2.7	言葉	2	新出	2	2.7		
笑顔	4	減少	-2	-2.7	個性	2	新出	2	2.7		
バドミントン	3	減少	-2	-2.7	行動	2	新出	2	2.7		
アイスクリーム	2	消失	-2	-2.7	自己中	2	新出	2	2.7		
アニメが好き	2	消失	-2	-2.7	自分に厳しく	2	新出	2	2.7		
子ども	2	消失	-2	-2.7	責任がある	2	新出	2	2.7		
字が汚い	2	消失	-2	-2.7	卑怯	2	新出	2	2.7		
声大きい	2	消失	-2	-2.7	勉強ができる	2	新出	2	2.7		
体	2	消失	-2	-2.7							1語の差は省略
髪が長い	2	消失	-2	-2.7							
漫画が好き	2	消失	-2	-2.7							
遊び	2	消失	-2	-2.7							
					1語の差は省略						

う。何のために学ぶのか、未来のためである、という学びの構造が教員によって伝えられていないのだろう。自分のいいところを伸ばす学びが楽しいことを伝える努力をしたい。伸びていこうとする生徒を相手にするのは、教員の喜びでもある。成長の方向意識を、教員が教育として抱く必要がある<sup>14)</sup>。

すべての回答語をカテゴリに分けて〈自分〉を《肯定》するか《否定》するかを見ると(図 15)、肯定が否定を上回っている。この点、K 中学校に希望がもてる。学校全体の意識が崩れているわけではない。

K 中学校の内情は、自己否定の象徴的な回答語である「バカ」が 9 語出現するうち、5 語が 1 年生、4 語が 2 年生で想起されている。学年別に意識状況を見ると 2 年生は、〈自分〉を《否定》する意識が、映画の前に、強い(表 12)。学年運営として考えるべきことであろう。しかし、これ以上の詳細の分析は、公表する本論では省く。

「バカ」の回答語は象徴的に課題を示すために取り上げやすいが、学校運営、学級運営においては、自己肯定の状況を知るために《肯定》と《否定》の量と言葉の質を見るべきである。一本の映画によって意識が動くのだから、教員の“本気”によって生徒の意識状況を変える

ことができる。

映画「青い鳥」を観ただけで、あえてだけでと表現するが、生徒の「バカ」の想起が 7 語減少し、自分の「弱い」(回答者数比 5.4%)姿に新たに思いを致している。この変容は、図 15 の左、および表 11 に見てとれる。

「弱い」自分の自覚は、映画によって最も増えた回答語である。

このように、「青い鳥」に触発されて自分の姿を反省している生徒の存在は、注目に値する。また友だちについて「大切」だとの意識が 17.6%増加していたが、自分についても「大切」(4.1%増加)だとの意識が増えている。自分について「好き」「きらい」(いずれも 2.7%増加)などの回答語の変化は、自分を振り返って内省する意識の動きが生じていると判断できる。内省および自分の大切さの認識は、自己肯定感へのすぐれた芽である。この方向を教育として活かしたい。

自分への振り返りは、道徳授業の核心であるし、教科の授業でも振り返りを授業の終末に組み込むことによって学びを定着させることができる。振り返りは、2017 年の中学校学習指導要領の眼目の一つでもあり、総則第 3 教育課程の実施と学習評価の 1 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を目指す項目の(4)に書かれてい

る。振り返りという教育にとって重要な要素を、映画「青い鳥」は生徒にもたらしめている。

繰り返すが、映画を観ただけで表 11 に見るように、「バカ」の言表が回答者数比 9.5%減少し、自分を振り返る意識が生まれる成果が得られるのだから、教育のエキスパートである教員が授業で、意識的にこれを行えば、児童生徒の意識を整え、振り返りによって内省できる児童生徒に育て、学力と道徳性を伸ばすことが可能である。それを唱道し束ねるのが、自己肯定感の育成を掲げる学校運営の役割であろう。自己肯定感を育てる方向に、教員が意思一致すべきである。

自分を肯定できる学校で学ぶことは、生徒にとって楽しい。協同の学び、ならびに振り返りのある授業は、学校教育が手を伸ばせばできるし、それによって児童生徒が変わる。それは教員の責任である。

K 中学校の学校としての基盤は崩れていない。生徒が〈学校〉から思い出していたのは「勉強」であり「友だち」であった。〈学校〉から想起される「楽しい」が遠くても、〈自分〉から想起される学校全体の雰囲気は《肯定》が上回っている。K 中学校の生徒は素直だと思う。映画を観て〈自分〉の「弱さ」(5.4%新出)や「卑怯」(2.7%新出)さを自覚し「大切」(4.1%増加)さを思い、「好き」か「嫌い」か内省する表 11 の様子は、教育の可能性を思わせる。自分は「自己中」だ、「自分に厳しく」あるべきだ、「責任がある」(それぞれ 2.7%新出)との自覚は、学校を改革する基盤となる意識の動きである。こうした一人ひとりの思いを育てるのは、道徳教育を要とする学校運営である。さらに、学校全体を動かす行事である。学校全体の行事、その一つが映画「青い鳥」の上映であるが、こうして雰囲気を動かそうとすれば、それに応える生徒がいることを、映画上映の

連想分析結果は教えている。

K 中学校の〈自分〉意識を学年別に見ると、それぞれの様相が見えてくる。表 12 に見えるように、中学校 2 年生の状況が芳しくない。《体》カテゴリが多いところを見ると、幼さがあるのだろう。〈自分〉と問われて体に関する言葉で答えるのは、小学校中学年に多い傾向である。何より《肯定》の少なさが気になる。《肯定》の少なさから、生きにくい意識状態にあると推定する。自分を肯定する想起より、否定する思いに圧倒されては、生きていきにくいだろう。学校はそこに手をさしのべるべきだ。

映画「青い鳥」を観た K 中学校の生徒の変化には、統計上有意な量的な差はなかった。しかし、回答語の質を見ると、〈いじめ〉が気付かないところで起こることを認識し、〈友だち〉の大切さを自覚し、〈自分〉に関して内省的になり、総じて児童の間に意識変容に向けたすぐれた芽を生み出した。学校にとっての課題は、これを、友だち仲間の楽しさを活かして協同の学びを採用し、自己肯定感を育てる方向へと意思一致することだと思える。

K 中学校の生徒は素直なところがあり、しかも少人数教育ができる態勢になっている。すると自己肯定感と一人ひとりの将来の夢を結びつけて自己肯定感を育てることが容易に思える。その目標となるであろう一つの連想マップを参考として掲げておく。図 15 の意識の学校と図 16 の学校とどちらで学びたいか、明らかであろう。

図 16 は、将来の夢と自己肯定感にあふれて卒業を迎えた小学校 6 年生の意識である。福岡県 K 市で自己肯定感育成を掲げて学校運営を行った実践結果として図 16 の〈自分〉連想マップが卒業前 3 月に生まれた。夢のある自己肯定の意識状況を実現できる左証として示しておきたい。

表 12 K 中学校 1 年生, 2 年生の映画を観る前の学年別カテゴリ別の〈自分〉意識

K中学校2年生上映前			K中学校1年生上映前		
カテゴリ	語数	回答者数比%	カテゴリ	語数	回答者数比%
属性	53	196.3	属性	39	150.0
否定	22	81.5	肯定	26	100.0
体	18	66.7	否定	16	61.5
肯定	12	44.4	他	7	26.9
他	4	14.8	体	1	3.8



どのような責任があるかに踏み込んで考えてもらう授業の可能性が開かれたことになる。いじめ問題についての各人の責任の自覚を求める道徳授業につなげたい。

換言すると、変わっていく生徒の意識に即したカリキュラム・マネジメントが必要である。道徳の教科化によって、教科書を1年間流して教えればいい事態になるわけではない。児童生徒の意識診断によって、道徳教育の方針を定めて、年間計画とともに、臨機応変に対応する編成が、特別な教科道徳を学校の運営に活かす道である。学校運営のために、また道徳という教科の今後のために、生徒の意識状況を基盤にした授業の工夫が求められる。

4. (生命尊重) 例年行う生命尊重の授業は、いのちが大切な理由の種類を豊かにすることをねらいに行えばいいことを、いのちについてのS校ならびにK校生徒の意識状況が示している。恒例化されたいのちの授業も、学校運営の一環としてねらいを絞って、この場合いのちの大切な理由の種類を増やすところに絞って、組むことによって、学校全体の雰囲気改善するとともに、教員が道徳授業を行う力をつける行事になる<sup>15)</sup>。
5. (自己肯定感) 生徒の自己肯定感の育成を学校運営方針として掲げるべきである。そして協同の学びを取り入れることが望ましい。生徒が友だち故に学校は楽しいと思ひ、友だち要因が生徒の意識に大きいのであれば、友だちとともに学ぶ授業を組む方向が見えてくる。自己肯定感を育てることを目的にした協同の学びは、学校の雰囲気を変える。また、教科の力の土台となる。それは、教育が、教える(教)だけでなく、つまり **teaching** だけでなく、〈育〉てる **caring** とともに成り立つ教育本来の意味を指し示す。一人ひとりを自己肯定感のある児童生徒に育てる教育の目的の自覚が、教員を、教育を担う授業者にする。生徒の未来に向かう力を育てる教育が、塾では得られない公教育の存在意義であろう。
6. (学校運営の手だてとして) いじめの課題は依然として重い。映画「青い鳥」は、学校がいじめの課題に取り組むために、責任の自覚や弱さの自覚、そして何より自己否定の意識を減少させて生徒を前向きにする点で使える。さらに、映画上映という全校行事を単発に終わらせず、学校運営と授業とに結びつけることが

できる。学校行事によって、学校の雰囲気を動かし得る。本論の2校の生徒の意識の動きを検討すると、映画を学校運営と授業とに結びつける手だてを見出すことができる。それは、教育臨床としての学校診断によって、映画を観た生徒の意識分析から、本論が示したところである。

連想調査の結果は、映画の意味を次のように明らかにした。すなわち、映画「青い鳥」は、自己肯定感育成の点からみて、生徒の意識において自己否定を有意に減少させ、姿勢を正して自分に向き合う方向に動かした。

日本における学校教育の課題は、自死を止めるための、また学力への努力を積み上げるための、そして児童生徒を育てるための自己肯定感の育成である。道徳授業も自己肯定感育成を目的とすることによって、価値項目の羅列を生徒の意識において統合できる。自己肯定感育成は、佐世保市や長崎市の事件以来まだ十分ではなく、学校の教育方針として、授業の目的として十分自覚されているようには見えない。例えば生命尊重に向けた努力の成果は認められるが、生徒の自分意識から分析すると、教育として十分に機能しているとは言いがたい。生命尊重の授業も、いのちの大切な多様な理由を考え、自己肯定感育成に結びつけることによって、新しい意味を持った展開を図ることができる。

自己肯定感育成に資する手立てとして特に、成長への夢を挙げておきたい。全体が雰囲気に流れることがあっても、一人であると思っても、それが孤独感にならずに自己肯定を維持できるよすがは、児童にとって成長への夢であろう。生徒が、自分意識において将来の夢を見いだしていない事態は、今日なお佐世保市の課題である。生徒の夢を聞くことは教員にとっても楽しいだろう。学校を楽しいと感じる即効薬ではないか。

学校が勉強するところだとの生徒の意識は崩れていない。すると、生徒が感じている友だちの楽しさを土台に、学びを通じた協同によって将来に向かえる教育体制をつくること、目的を自己肯定感育成におくことが学校の改革の方向性だと考える。

2つの学校の生徒の意識分析を行った筆者は、各学校での映画上映に立ち会うことができず、学校を訪問して

いない。つまり本論の分析は、連想データだけによる分析である。それは結果として、連想法による生徒の意識の臨床分析がどれほどのことを語れるかの試みになった。実際見ていなくての語りの齟齬は、各学校の教育の場の声によって修正いただくようお願いする。

本映画上映には、多くの方々のご協力をいただいた。当該中学校の教職員の皆さん、生徒の皆さん、そして長崎県障害福祉課、佐世保市教育委員会、フリースペースふきのとう、長崎県映画センターである。記して深謝申しあげる。

## 註

- 1) 2005年に佐世保市・五島市で行った調査については、当該の学校を含む調査であったため、まとまった形での公表は控えた。一般的な状況を、上菌恒太郎(2007)、(2011)に発表したに止まる。
- 2) 連想法による提示語を〈〉、回答語を「」、回答語を分けたカテゴリを《》で示す。
- 3) 上菌恒太郎(2017)、連想法による道徳授業評価 教育臨床の技法、教育出版、p.127参照。
- 4) K中学校の連想マップの左上に2017年が表示されているのはデータ入力時点である。本論冒頭に書いたように、映画鑑賞は2016年12月であった。
- 5) 提示語〈学校〉によって想起された全回答語のうち回答語「楽しい」がどのくらい想起されているかを、3つの調査について比較すると、次の表に見るように、量としてK中学校で有意に少ない( $p<.05$ )。

3(学校)調査全回答語に占める「楽しい」の出現数			
K中学校	74 ▲		9 ▽
S中学校	156		53
2005佐世保・五島	424 ▽		165 ▲
(▲有意に多い、▽有意に少ない、 $p<.05$ )			

- 6) 上菌恒太郎、学校に関するドイツ、マレーシア、日本の意識比較研究—連想調査によるオスナブリュック、ペナン、長崎の調査—、長崎大学教育学部紀要—教育科学—、第65号、2003、pp.21-24。
- 7) 学校における友だちの重要性、友だちがいるから学校に行く様子は、追連想による子どもが感じた学校の評価(上菌恒太郎、2011、連想法による道徳授業評価 教育臨床の技法、教育出版、pp.150-151)を参照。

- 8) 内閣府が行う「第7回 世界青年意識調査」(2003)によると、「悩みや心配ごとの相談相手」として日本では「近所や学校の友だち」(50.5%)が最多だが、ドイツやアメリカでは「母」(ドイツ 63.4%、アメリカ 57.9%)が最多である。第8回の同調査(2008)では、ドイツは調査されていないが、日本では「近所や学校の友だち」が最多で53.4%、アメリカ、イギリスでは「母」が最多で、51.5%、57.6%である。しかし、上菌恒太郎(1995)の調査で、死に関しては8歳から18歳で、長崎市では「母」に最も多く10.2%が尋ね、「友だち」には3.2%である。ドイツ(ガルス、フランクフルト aM.)では「母」に29.4%、「友だち」には11.7%が尋ねている。友だち関係について、千石保、鐘ヶ江晴彦、佐藤郡衛(1994)は、日本では「同じクラスの人」「以前同じクラスだった人」との付き合いが95.8%で、西ドイツでは「学校以外のスポーツクラブや趣味のサークルで知り合った人」との友だちが48.5%いるという。学校生活が基本的に午前中5時間ほどで終わるドイツは、制度上午後のスポーツクラブなどで友だちができる。そのため、いじめが、日本のように直ちに、ほとんどすべての友だちの場でできごとにならない。すると学校の縮減、いじめによる自死を防ぐ抜本策として、学校を教科だけの半日制にする考えもありうる。
- 9) 日本人のいじめの意味がおそらく1980年代半ばから変化し、国語辞典の記述が変わった点については、上菌恒太郎、2011、p.164-165を参照。
- 10) [http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h27honpen/b1\\_01\\_01.html](http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h27honpen/b1_01_01.html) (2017年5月7日)
- 11) <http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/jisatsu/16/dl/1-03.pdf> (2017年5月7日)
- 12) 東京都は2008年から「子供の自尊感情や自己肯定感を高めるための教育の充実」を推進計画に位置付け、5ヵ年計画で研究を進めた。ここでの自己肯定感はしかし、「子供の自尊感情や自己肯定感を高めるためのQ&A」に見るように、高い方がいいとの単純な構図で話が進められている。
- 13) 該当する文献を挙げておく。遠藤辰雄、井上祥治、蘭千壽、2002、1992初版、セルフ・エスティームの心理学 自己価値の探求、ナカニシヤ出版/Blaney,Nancy T., Stephan, Cookie, Rosenfield, David,

- Aronson, Elliot, Sikes, Jev, 1977, Interdependence in the Classroom: A Field Study, *Journal of Educational Psychology* Vol.69 No.2, 121-128 / Johnson, David W., 1980, Group Processes: Influences of Student-Student Interaction on School Outcomes, in James H. McMillan, *The Social Psychology of School Learning*, Academic Press / Johnson, David W., Maruyama, Geoffrey, Johnson, Roger, Nelson, Deborah, Skon, Linda, 1981, Effects of Cooperative, Competitive, and Individualistic Goal Structures on Achievement: A Meta-Analysis, in *Psychological Bulletin* Vol.89 No.1, 47-62 / Stanne, Mary Beth, Johnson, David W., Johnson, Roger T., 1999, Does Competition Enhance or Inhibit Motor Performance: A meta-Analysis, in *Psychological Bulletin*, Vol.125 No.1, 133-154
- 14) 教科担任制を基本とする中学校において道徳授業にどう組むか、1つの考えを書いておく。持ち回り道徳またはローテーション道徳と言われるやり方である。(1)複数の教員で1つの教材を深く研究し、その授業を複数の学級で、場合によっては学年を超えて複数回行う、(2)その際、TTの形をとり、可能な限り学級担任が加わる。そこには次の利点がある。1)学級担任を1人で孤立させず、2)担任が一人で1時間の道徳授業をおこなって毎回終わるよりも、より深い授業研究ができ、3)協同によるノーハウの伝達になり、4)複数回の実施によって授業改善できるので、手の内に入った教材と授業を作りだし、5)進行に伴って授業研究の負担が軽くなり、道徳道徳授業に自信が持てるようになる。
- 15) いのちを大切にする理由を増やす授業については、上藺恒太郎、森永健二、延岡理恵子、里村ひとみ、寺嶋勲(2010)が参考になる。
- 定感, 道徳教育方法研究第20号, pp.11-20
- 上藺恒太郎(2015)「子どもを支える道徳授業の必要」『教育哲学研究』第112号, pp.130-150
- 上藺恒太郎(2011)『連想法による道徳授業評価 教育臨床の技法』教育出版
- 上藺恒太郎, 森永健二, 延岡理恵子, 里村ひとみ, 寺嶋勲(2010), 異学年合同・地域素材でおこなういのちの道徳授業—臨床道徳授業のために—, 道徳教育方法研究第15号, pp.1-11
- 上藺恒太郎(2007), 長崎県の教育の課題 自尊感覚を育成する教育を, in 長崎人権研究所, もやい 長崎人権・学 53号
- 上藺恒太郎(2003), いじめに関するドイツ, マレーシア, 日本の意識比較研究—連想調査によるオスナブリュック, ペナン, 長崎の大学生の調査—, 長崎大学教育学部紀要 教育科学第64号, pp.13-27
- 上藺恒太郎(1995), 死について子どもたちは誰に聞くか—日本とドイツでの調査研究—, [http://naosite.lb.nagasaki-u.ac.jp/dspace/bitstream/10069/30936/1/kyoikuKyK00\\_49\\_03.pdf](http://naosite.lb.nagasaki-u.ac.jp/dspace/bitstream/10069/30936/1/kyoikuKyK00_49_03.pdf)
- 上藺恒太郎, 森永謙二(2013)「自己肯定感を育てる道徳授業 - 共同で学ぶ思いやり -」長崎大学教育学部紀要 教育科学第77号, pp.1-18。この論をはじめ長崎大学教育学部紀要に発表した論文はネット上から見ることができる。本論のURLは以下の通り：  
file:///C:/Users/kamizono/AppData/Local/Temp/Kamizono%20hoka\_1-1%202013-1.pdf
- 千石保, 鐘ヶ江晴彦, 佐藤郡衛(1994), 日本の中学生国際比較でみる, 日本放送協会出版
- 森永謙二, 上藺恒太郎, 九重真由美, 古賀佳緒里(2013), グループを活用した1単位時間の自己肯定感の変容—連想法による授業評価—, 協同と教育第9号, pp.27-36

## 参考文献

- アンドレ・クリストフ&ルロール・フランソワ(2012)『自己評価の心理学 Le' stime de soi』紀伊國屋書店
- アレント・レイプハルト(2014)『民主主義対民主主義 多数決型とコンセンサス型の36カ国比較研究(原著第2版)』粕屋祐子・菊池啓一訳, 勁草書房
- 岡崎耕, 上藺恒太郎, 未来からの振り返りによる自己肯